科学研究費助成事業 基盤研究（B）
（2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686）

「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績（2018 － 2019）[1]

Summary and Activities of the Research Project: "Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages：2018 – 2019"

研究代表者 富盛伸夫
Nobuo Tomimori (Project Leader)

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

1. 本研究プロジェクトの研究課題と問題設定

ヨーロッパ連合（以下、EU）統合の象徴の一つであり言語教育改革の基盤をなす「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」(Common European Framework of Reference for Language、以下 CEFR；刊行物は本稿では *CEFR2001* と呼ぶことにする[2]）は、公開されてから約 20 年となろうとしている現在、その理念（行動中心複言語主義、コミュニケーションタスクと解決能力の育成、通言語的到達度評価方法など）と実践面の実績は急速に世界各国に拡大しつつあり、言語教育の現場そのものを変容させている。本研究の目的は、日本語を含めた非 EU 諸語、特にアジア諸語への CEFR の適用可能性の検証が現時点で必要となっているという認識から、以下の 3 点に集約される。

(1) EU で現在進行中の CEFR 改訂の動向をふまえ、国内外の研究者とも連携しつつ、CEFR の東南アジア諸語への適用に際して必要となる言語類型論的、社会・文化的特質を考慮した新たな言語能力記述方法を提案して日本および世界の言語教育分野に発信し、より柔軟な CEFR の適用可能性を拡げることに貢献すること。
(2) 言語使用地域で言語学習者の複層的言語使用状況に配慮した言語コミュニケーション能力の新たな評価法と教育方法に向けて研究すること。
(3) CEFR-J の実施を進める日本の言語教育政策および現代社会のニーズ、特に中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本における CEFR の受容の様態を検証し発信すること。

以上の研究目的に接近するため、特に、EU で 2018 年に発表された新たな CEFR の改訂・追補版 Companion Volume with New Descriptors（以下、*CEFR2018*）[3]の動向をふまえ、アジア諸国の研究者・教

[1] 本稿は本科研プロジェクトの活動の実績報告を中心にまとめたものである。本科研の概要は、先行する富盛代表の科研情報とともに、東京外国語大学語学研究所のサイト内にリンクされている協働科研一覧から参照できる。（http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR/index.html）
[2] *CEFR2001* の本文は https://rm.coe.int/1680459f97 を参照。
[3] *CEFR2018* の本文は https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989 を参照。

育者とも連携しつつ、日本および世界の言語教育分野に研究成果を還元し貢献することに努めたい。

なお、研究の分野・範囲を示すキーワードを記すと以下のとおりである。(順不同)

(a) CEFR　(b) アジア諸語　(c) 言語類型　(d) 社会・文化的適切性　(e) 言語能力評価法

2. 本研究の実施計画(3年間)および経過報告(2018-2019 年度)

I. 研究作業班：研究計画に対応した 3 つの作業班を組織し、分担者は専門研究領域において計画遂行に向けて協働する。

A 班：

EU の均質的な土壌に生まれ適応環境に制約のある CEFR を批判的に検討し、それとは異なる東南アジア諸語の言語的・社会的・文化的多様性を考慮した付記事項（South Asian Supplements）付きの能力記述項目を開発し、より適切に運用しうる柔軟な能力評価方法を提案する。

2018 年度はこの目的で、社会・文化的付記事項付きの能力記述項目を抽出し、東アジア諸語を含む言語ごとに CEFR の A1～C1 レベルに定義して EU の CEFR スケーリングと調整する。分担者は担当地域の国際連携研究機関・研究者と協働し、各地に特徴的な語用論的ストラテジー（売買などの交渉、依頼、断り、謝罪、提案など）や配慮表現など、東南アジア版能力評価記述項目に反映しうるような社会・文化的指標の抽出を行ってきた。

2019 年度は社会内関係が反映した待遇機能・談話構成や会話体・文章体の交替も研究対象として包括し、異文化間言語コミュニケーション能力（適切な言語的応対能力）の記述方法の試案作成に向けて活動を展開している。

2020 年度には東アジア・東南アジア地域の各言語に適した能力評価記述項目（descriptors）を組み込んだ CEFR のアジア諸語対応版を提案するための評価方法を提案する。分担領域は、藤森（日本語)、南（韓国語)、田原（ベトナム語)、鈴木（ラオス語)、上田（カンボジア語)、野元（マレーシア語)、スニサー・齋藤（タイ語)、岡野（ビルマ語)、降幡（インドネシア語)、峰岸（東南アジア諸語の類型論)、中国語は台湾師範大学の協力者に依頼する。

B 班：

EU による CEFR 改訂版 *CEFR2018* における複層的異文化間言語教育に関する動向を調査しつつ、東南アジア言語圏の複層的言語使用を分析し言語学習者の複言語使用状況に配慮した言語コミュニケーション能力をスケーリングするための方法論的研究を行う。

2018 年度は A 班のメンバーと協働しつつ各言語地域の複層的言語コミュニケーションの実際についてサンプリングをして社会・文化的視点からの動態的分析とモデリングを進め、2019 年度から東南アジア言語圏の動態的・複層的言語使用と言語学習者の複言語使用状況を考慮した言語コミュニケーション能力測定方法の開発に向かう。

担当領域は、根岸（CEFR 改訂調査)、富盛（マレーシア・Kristang 語使用地域)、矢頭（社会言語学・アジアの英語変種)、拝田（アジア・太平洋地域の複言語使用研究)、峰岸（東南アジア諸語の言語動態・複言語使用研究)、野元（マレーシアの複言語併用研究)、降幡（インドネシアのスンダ語使用地域）荻原寛（研究協力者：フィリピンの社会言語学的動態研究)、内藤理佳（研究協力者：マカオ・ポルトガル語系話者の言語・文化・社会コミュニケーション研究）スライマーン（研究協力者：アラビア語圏の社会・文化的特質研究)。

C 班：

B 班の課題研究の視点を日本の複言語学習の再検証作業に応用し、中等教育・高等教育および社会的ニーズに対応した生涯教育における複数言語の能力到達度評価法の改善に向けて成果を発信する。

2018 年度は国内の CEFR 研究グループや他の言語能力評価法の研究者との研究交流により、中等教育や生涯教育を含む一般社会にも妥当性の高い複言語能力到達度測定モデルを構築するための研究を進めてきた。

2019 年度からは CEFR-J 研究者などと連携して日本の言語教育政策および中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本の言語教育に適用しうる複言語使用の能力記述方法の開発研究を行い、担当者が各自の領域で成果発信を行う。富盛（総括および生涯教育）、根岸（CEFR-J、中等教育英語教育）、拝田（言語教育政策、英語教育法）、山崎吉朗（研究協力者：中等教育・生涯教育）。

研究統括班：

上記３つの研究作業班の円滑な課題遂行を把握・管理し、研究代表者富盛が班長として総括的責任を持つ。

初年度より各班との協働によりアジア諸国および国内のアジア諸語研究者の協力を得て、言語・社会・文化的特質の付記事項抽出の作業を評価するための企画をする。

EU で進行している CEFR 改訂の最新動向と複層的社会・文化的コミュニケーション研究および異文化間言語教育に関する研究情報を把握しつつ、本科研研究による成果の有効性を検証する。

これまでに全分担者による運営委員会を２回、統括班委員による統括班会議を 16 回開催したが、随時メールなどによる稟議で意思疎通を図っている。研究に支障が出ないように東京外国語大学語学研究所の配慮により研究拠点の確保などに適切な対応をすることができた。

II. 研究連携体制：国内外の言語能力評価法研究分野の専門家との協力体制により講演会、シンポジウムへの参加を含む研究協力が得られている：インド・デリー大学、フィリピン・デラサール大学、マレーシア・マラヤ大学、南オーストラリア州教育省など。

東京外国語大学が参加する「アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム」（CAAS）加盟大学との研究協力体制は本研究でも活用している：シンガポール国立大学言語研究センター等。

国内では CEFR 研究グループ（東京外国語大学 CEFR-J など）、JLC 日本語スタンダーズ研究プロジェクト、立命館アジア太平洋大学、神田外語大学など、多くの他の科学研究費助成事業による研究グループと連携している。

3. 研究活動概要

3.1. 国際研究集会の開催

3.1.1. 国際ワークショップ：「言語教育（CEFR）国際ワークショップ」

2019（令和元年）年 9 月 27 日に本科研プロジェクトが主催し、東京外国語大学語学研究所の共催により開催された。本ワークショップは「言語教育（CEFR）国際ワークショップ：アジア・太平洋地域の言語教育」と題し、オーストラリアとマレーシアから言語教育、言語教育政策の専門家を招聘し、両国の最新の言語教育改革への取り組みとその相違点を知ることができた。CEFR の受容や反響は国や関係機関ごとに多様であり、地域ごとの教育史と実情にあわせたカスタマイズの努力が続けられていることが把握できた。

「言語教育（CEFR）国際ワークショップ：
アジア・太平洋地域の言語教育 –オーストラリアとマレーシアの現在–」
«Language Education in Asia-Pacific Region: Current Issues of Australia and Malaysia»

日時：2019（令和元）年 9 月 27 日（金）17:30～20:20
会場：東京外国語大学 語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

<タイムテーブル>
17:30-17:40　挨拶
「科研 (B)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」と、この国際ワークショップのめざすもの」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授：研究代表者）
17:40-18:20　講演 1
「オーストラリアの言語教育–オーストラリアン・カリキュラムという文脈における諸政策，展望，そして多様性–」
«Languages Education in Australia; policies, perspectives and diversity within the context of the Australian Curriculum»
Ms Antonella Macchia（南オーストラリア州教育省）
18:50-19:30　講演 2
「マレーシアにおける英語教育への CEFR 導入をめぐる議論について」
«Putting the CEFR into Malaysian English Language Education: The Debates Surrounding Its Implementation»
Prof. Dr. Stefanie Pillai　（マラヤ大学教授）
19:50-20:20　総合討議

※講演言語：英語（通訳なし）
※共催：科学研究費助成事業基盤研究(B)「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」（研究代表者：矢頭典枝　神田外語大学）、東京外国語大学語学研究所

3.1.2. 国際研究集会（講演会）

2018 年 4 月から 2019 年 3 月の間に、上記の国際ワークショップを含め、インド、フィリピン、マレーシア、オーストラリアからの言語社会学、言語教育学の著名な専門家を講師に招いて 3 回の国際研究集会を開いた。特に、インド・デリー大学の Shobha Satyanaath 准教授とフィリピン言語学会前会長でもあり多言語状況の研究者でもある Shirley Dita デラサール大学准教授からは、多言語社会研究の視点から複言語教育の実際と問題点などを学ぶことができ、本研究の B 班に関わるフス層的使用状況における言語社会学・言語教育学上の知見を得ることができた。

国際研究集会（講演会）
«Mapping English in India in Time and Space»
「インドの英語：時間と空間から捉える」
日時：2018（平成 30）年 7 月 6 日　18:00～19:30

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

講演者：Shobha Satyanath（インド・デリー大学准教授 / 社会言語学）

※使用言語：英語（一部日本語通訳付き）

※共催：東京外国語大学語学研究所

«Plurilingual Situation and Language Education in the Philippines»

「フィリピンにおける複数言語使用状況における言語教育」

日時：2019（令和元）年 7 月 12 日　18:30～19:15

会場：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟 4 階 419 号室）

講演者：Shirley Dita（フィリピン・デラサール大学准教授、フィリピン言語学会前会長 / 社会言語学、危機言語研究）

※使用言語：英語

※共催：東京外国語大学語学研究所

共催講演会

«Philippine English and World Englishes»

「フィリピン英語と World Englishes」

日時：2019（令和元）年 7 月 16 日　14:50～16:20

神田外語大学 クリスタルホール

講演者：Shirley Dita（デラサール大学准教授、フィリピン言語学会前会長 / 社会言語学、危機言語研究）

※使用言語：英語

※主催：科学研究費助成事業（基盤研究 B）「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」研究代表者：矢頭典枝（神田外語大学）

3.2. 研究交流の場としての研究会の開催

本プロジェクトの日常的な活動として随時研究情報の交換や交流の場として語学研究所を拠点に研究会を開催した。2018（平成 30）年 6 月の第 1 回研究会から 2019（令和元）年 11 月までに、合計 8 回の研究会・研究集会を行なっている。本科研による研究会・研究集会はいずれも東京外国語大学語学研究所の共催である。詳細は、本科研の Web サイトを参照されたい。

第 1 回研究会

日時：2018（平成 30）年 6 月 29 日（金）18:00～19:30

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究に向けて：企画と展望」

富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 2 回研究会

日時：2018（平成 30）年 10 月 26 日（水）18:00～20:15

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 「世界の日本語教育最前線
ーヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会（VENEZIA ICJLE 2018）からー」
藤森弘子（東京外国語大学教授）
2. 「アジア諸語の社会・文化的ストラテジーに関わる CEFR 調査指標の策定」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
3. 「東外大生の専攻語選択に関わる要因の分析に向けて」
野元裕樹（東京外国語大学准教授）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 3 回研究会

日時：2018（平成 30）年 12 月 7 日（水）18:00～20:00

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 「タイ語での人称代名詞の使用実態とタイ語教育への活用 ータイでの現地調査資料からー」
スニサー・齋藤（東京外国語大学）
2. 「CEFR 研究の最新動向とアジア諸語の社会・文化的特質に関わる CEFR 項目の提案」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
3. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 4 回研究会

日時：2019（平成 31）年 1 月 25 日（金）18:00～20:20

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 「我が国の教育改革と外国語教育政策 −英語以外の外国語教育への道程−」
山崎吉朗（一般財団法人日本私学教育研究所）
2. 「シンガポール国立大学言語教育シンポジウム CLaSIC2018 報告
−言語教育研究の最前線−」
野元裕樹（東京外国語大学）
3. 「ベトナム語はどう教えられているのか、どう学ばれているのか
−ベトナム語教育と評価の現状−」
田原洋樹（立命館アジア太平洋大学）
4. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 5 回研究会

日時：2019（令和元）年 5 月 24 日（金）18:00～21:15

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 発題：「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したコミュニケーション能力記述方法の開発と CEFR への応用に向けて」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
2. 「韓国語における『感謝と謝り』の言語特徴」
南 潤珍（東京外国語大学）
3. 「ビルマ語における『依頼と断り』の言語特徴」

岡野賢二・トゥザライン（東京外国語大学）

4. 「カンボジア語における『定価のない商取引』の言語特徴」
   上田広美（東京外国語大学）
5. 「タイ語における『挨拶』の言語特徴」
   スニサー・齋藤（(東京外国語大学）
6. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 6 回研究会

日時：2019（令和元）年 7 月 11 日（木）18:00～20:15

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

司会：富盛伸夫（東京外国語大学）

1. 「CEFR2018 年版（Companion Volume）で提案された社会・文化的コミュニケーション能力の評価枠組みと、アジア諸語の言語コミュニケーションにおける『適切性』(appropriateness）について」
   富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
2. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 7 回研究会

日時：2019（令和元）年 10 月 4 日（金）18:00～20:15

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 「アジア諸語の呼称と人称詞 －ポライトネスの視点から－」
   富盛伸夫（科研代表者）
2. 「アジア諸語の社会・文化的特質と CEFR アジア版作成の試み
   －タイ語、ビルマ語、カンボジア語、韓国語－」
   科研統括班（スニサー・齋藤、岡野賢二、上田広美、南潤珍）
3. 「CEFR『準拠』への道程 -立命館アジア太平洋大学での CEFR 実装例-」
   田原洋樹（立命館アジア太平洋大学）
4. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第 8 回研究会

日時：2019（令和元）年 11 月 29 日（金）18:00～20:30

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室）

1. 「はじめに：アジア諸語教育における社会・文化的項目と CEFR を活用した評価方法について」
   富盛伸夫（東京外国語大学：科研代表者）
2. 「アジア諸語の社会・文化的特質と CEFR アジア版作成の試み(2)
   －マレーシア語、インドネシア語、ラオス語、日本語－」
   野元裕樹、降幡正志、鈴木玲子、藤森弘子（東京外国語大学）
3. 「アラビア語における社会・文化的特質 －禁忌と回避の実例を中心に－」
   スライマーン・アラーエルディーン SOLIMAN, Alaaeldin（東京外国語大学）

4. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

3.3. 成果発表の出張など（主なもののみ）

藤森弘子：2018 年 8 月 1 日～8 月 6 日　ヴェネツィア / イタリア

「ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会（VENEZIA ICJLE 2018）」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

野元裕樹：2018 年 12 月 5 日～12 月 9 日　シンガポール / シンガポール

「シンガポール国立大学の CLaSIC」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

藤森弘子：2019 年 8 月 17 日～8 月 20 日　長春 / 中国

東北師範大学「中国赴日本国留学生予備学校 40 周年記念日本語教育交流シンポジウム」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換、日本語教員へのヒアリング調査を行った。

根岸雅史：2019 年 8 月 28 日～8 月 30 日　名古屋工業大学 / 愛知

「大学英語教育学会（JACET）第 58 回国際大会」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

野元裕樹：2019 年 12 月 7 日～12 月 11 日　シンガポール / シンガポール

シンガポール国立大学言語教育主催「東南アジア言語教育・学習シンポジウム The Southeast Asian Language Teaching and Learning Symposium (SEALTLs)」に参加し研究発表（*Using MALINDO Conc for Malay/Indonesian language classes.*）及び他の研究者との情報交換を行った。

3.4. 運営会議・統括班会議

運営会議：2018 年 6 月 29 日（第 1 回）、2019 年 5 月 24 日（第 2 回）

統括班会議：第 1 回（2018 年 6 月 29 日）～第 16 回（2020 年 1 月 27 日）

4. 研究実績の総括（2018-2019）

4.1. 2018 年度

研究統括班が研究作業の円滑な遂行を把握・管理し、EU で進行している CEFR 改訂の動向を *CEFR2018* の解析を行うことで最新情報を把握しつつ、アジア諸語の特性に対応した能力評価項目の有効性を検証する準備作業を行った。

A 班：

CEFR の東南アジア諸語への適用に際して必要となる言語類型論的、社会・文化的特質を考慮した新たな言語能力記述方法を提案する目的で、東アジア諸語を含む 4 言語のヒアリング調査により言語・社会・文化的付記事項付きの能力記述項目を抽出する作業を行った。

B 班：

複層的な言語使用地域での言語学習に配慮した言語コミュニケーション能力の新たな評価法構築に向けてアジア言語圏の動態的言語使用を分析した。

国際研究連携事業として、Shobha Satyanath（インド・デリー大学准教授）氏を招き、国際講演会 «Mapping English in India in Time and Space» をとおしてモデル構築に関わる議論を行った。

C 班：

現代社会のニーズ、特に中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本における CEFR の受容様態の検証を行った。特に研究協力者山崎吉朗は日本の外国語教育政策における複数言語教育の問題点を整理した。

主な研究発信では、2018 年度は本科研の主催で年間 5 回の国際講演会・研究会を開催し、研究成果の交流に努めた。2018 年 12 月外国語教育学会第 22 回大会シンポジウム『CEFR と言語教育の現在』において研究代表者富盛伸夫が基調講演「CEFR と言語教育の現在、欧州諸語からアジア諸語への適用妥当性」を行い、本科研の研究課題に関する成果公開とともに貴重な意見交換を行うことができた。藤森弘子は 2018 年 8 月イタリアで開催された「ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会」に参加し研究発表を行った。野元裕樹は 2018 年 12 月にシンガポール国立大学で開催された言語教育シンポジウム CLaSIC2018 でマレーシア語の学習動機に関わる発表を行った。

以上の研究経過と成果発表は、本科研の Web サイトの構築により 2019 年 3 月に発信している（脚注 1 の URL を参照されたい）。

4.2. 2019 年度

EU で進行している CEFR 改訂の最新動向（*CEFR2018*）を踏まえ、アジア諸語の特性に対応した付記事項付きの CEFR 能力評価項目（CEFR Descriptors with Asian Supplemets）の原案を研究代表者と研究分担者 6 名からなる統括班のもとで具体化した。

A 班：

EU 主導の CEFR を再検証し、アジア諸語の言語・社会・文化的多様性を考慮した能力記述項目を開発することにより、実態にあった柔軟な評価方法を提案した。特に、2019 年度は社会・文化的人間関係が反映した待遇機能・談話構成を含む適切な社会言語適切性（Sociolinguistic Appropriateness）の記述方法の試案作成に向けて活動した。

B 班：

2019 年度以降は CEFR 改訂版における複層的異文化間言語教育に関する動向を調査するため国際研究集会を開くなどにより、アジア諸語圏の複層的言語使用の中で言語学習者の複言語使用状況に配慮した方法論的研究を行った。A 班のメンバーと協働しつつ各言語地域の複層的言語コミュニケーションについて社会・文化的視点からの動態的分析を進め、言語学習者の複言語使用状況を考慮した言語能力測定方法の開発を試みた。特記すべきは、比較対象としてエジプトのアラビア語を背景にアラビア語文化圏の特質を研究したことと、*CEFR2018* 版で Mediation の一つとして取り上げられている手話コミュニケーションを対象に新たな研究対象を拡げたことである。

C 班：

B 班の課題研究の視点を日本の複言語学習の再検証作業に応用し、中等教育・高等教育および社会的ニーズに対応した生涯教育における複数言語の能力到達度評価法の改善に向けて研究した。CEFR-J 研究者などと連携して日本の言語教育に適用しうる複言語学習における能力記述方法の提案、および大学入試の外国語科目の改定案を含め研究している。

主な研究交流と成果発信では、別掲のように、2019 年度は本科研の主催で年間 6 回の国際講演会・国

際ワークショップおよび研究会集会を開催し、研究成果の交流に努めた。2019 年 12 月外国語教育学会第 23 回大会において研究代表者富盛伸夫とスニサー・齋藤の共同発表で「タイ語教育における社会文化的適切性と CEFR への適用 ―ポライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心に―」を発表した。

国際講演会としては、フィリピンから Shirley Dita（デラサール大学准教授）氏を招き、インドの多言語社会の中での英語教育についての意見交換を行った。国際ワークショップとしては、マレーシアから Stefanie Pillai（マラヤ大学教授）氏とオーストラリアから Antonella Macchia（南オーストラリア州教育省）氏を招き、「言語教育（CEFR）国際ワークショップ」を開催した。

藤森弘子は 2019 年 8 月に東北師範大学（中国・長春）で開催された「中国赴日本国留学生予備学校 40 周年記念日本語教育交流シンポジウム」で研究発表および日本語教員へのヒアリング調査を行った。

野元裕樹は 2019 年 12 月にシンガポール国立大学で開催された「東南アジア言語教育・学習シンポジウム」でマレーシア語の学習動機に関わる発表を行った。

以上の研究経過と成果発表は、東京外国語大学語学研究所の公式 Web サイトで協働科研のリンクにより 2020 年 3 月に発信している。

4.3. 総合的自己評価と総括

総括して、3 年の研究期間のうち当初 2 年間では、研究成果を国内外の関係学会・研究集会および Web 上で公開したことで問題の喚起を図るなど、当初の目的と計画に従って研究活動は全体として順調に進展したといえる。

＊＊＊＊＊＊

謝辞

本研究は研究代表者及び分担者・研究協力者の多くが所員として活動する東京外国語大学学内共同利用施設「語学研究所」を主たる研究上の拠点とすることで、研究の遂行に必要な機器などの設備、研究会やセミナー等を開催するための研究空間などの便宜が受けられ、研究コスト節減とともに研究環境の利点が与えられた。2020（令和 2）年 3 月に中間報告書を刊行できたのも語学研究所を研究拠点とさせていただいたおかげである。

上記研究所では Web サイト[4]を通して言語学・言語教育学の研究成果を社会に向け常時閲覧可能としているが、本科研の成果も、同 Web サイトにおいて成果を公開している。この成果発信のための便宜をはかっていただいている東京外国語大学語学研究所に感謝の意を表する。

日常的な研究活動の支援と中間報告書の準備には同研究所事務補佐の深尾啓子さん、東京大学の YI Yeong-il さんにひとかたならぬご尽力をいただいたことを深く感謝して記します。

[4] 東京外国語大学語学研究所のサイト（http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/index.html）を参照。